二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空
形容詞・ク・用（ウ音便） 接助 格助 四段・用
いみじう 黒き に、雪少しうち散りたるほど、
形容詞・シク・用（ウ音便） 形容詞・ク・体 接助 副詞 存続「たり」体 四段・用
（くろど）（とのもづかさ）
黒戸 に 主殿寮 来て、「かうて 候ふ。」と言へば、
格助 カ変・用 接助 副詞 ⓚ主殿寮→作者 四段・終 四段・已 格助 接助
四段・用 接助
寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の。」とてある
完了「たり」体 格助 格助 ラ変・体
上一・已 （ふところがみ）
を見れば、懐紙 に、
格助 接助 格助
少し春ある 心地こそすれ
副詞 ラ変・体 係助 サ変・已
ラ変・体
とあるは、げに今日のけしきにいとよう合ひ
格助 係助 副詞 格助 格助 形容詞・ク・用（ウ音便） 副詞 四段・用
存続「たり」体
たるを、これが本はいかでかつくべからむ、と
格助 格助 係助 係助 当然「べし」未 格助 推量「む」体 下二・終 副詞
完了「ぬ」終
思ひ煩ひぬ。「たれたれか。」と問へば、「それそれ。」
四段・用 係助 格助 四段・已 接助
四段・終
と言ふ。みないとはづかしき中に、宰相の御いらへ
格助 副詞 形容詞・シク・体 格助 格助
を、いかでかことなしびに言ひ出でむと、
格助 副詞 係助 格助 推量「む」体 下二・未 格助
心ひとつに苦しきを、御前に御覧ぜ させむ
格助 形容詞・シク・用 接助 （おまへ） 格助 ⓢ作者→中宮定子 サ変・未 使役「さす」未 意思「む」終
格助 接助
とすれど、上の おはしまして、大殿籠り
サ変・已 格助 ⓢ作者→帝 四段・用 接助 ⓢ作者→中宮定子 四段・用
存続「たり」終 係助
たり。主殿寮は「とくとく。」と言ふ。げにおそう
副詞 副詞 格助 四段・終 副詞 形容詞・ク・用（ウ音便）
仮定（婉曲）「む」体
さへあらむは、いと取りどころなければ、さはれ
副詞 ラ変・未 係助 副詞 形容詞・ク・已 接助 感動詞
とて、
格助 接助
空寒み 花に まがへて 散る雪に
形容詞・ク・「寒し」の語幹＋接尾語「み」 格助 下二・用 接助 四段・体 格助

二月の末ごろに、風がひどく吹いて、空が
とても暗く、雪が少し舞い散っている時に、
黒戸に主殿寮が来て、「ごめんください。」と言うの
で、近寄ったところ、「これは公任の宰相殿からの
お手紙です。」と言って差し出すのを
見ると、懐紙に、
「少し春ある心地こそすれ」
（少し春のような気持ちがします）
と書いてあるのは、本当に今日の様子にとてもよく
あっているけれども、
これの上の句はどのように付ければよいのか、と
思い悩んでしまった。「（公任の宰相殿と一緒にいる
のは）誰か」と問うと、「だれそれ（がおられます）」
と答える。みんなとても立派な人たちの中に、宰相
殿のお返事を
どうしていい加減に言い出せようかと、
自分一人の心では苦しく、中宮様にお目にかけよう
とするけれど、帝がいらっしゃって、おやすみにな
られている。主殿寮は「はやく、はやく。」と言う。
本当に（歌が下手な上に）遅くまで
なっては、とても取り柄がないので、「ままよ」
と思って、
空寒み花にまがへて散る雪に
（空が寒いので、花に間違えるように散る雪に）

©高校古文No.1授業ノート https://kobun.info/